

天遊 Ten You

大阪教育大学広報誌

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

Winter 2018 Vol.46

ラボ訪問

授業探訪

STUDENTS NOW!

BAGの中身

附属学校園ウォッチ

ゼミ室こぼれ話

TOPICS

特集
1

教職を知る、子どもと関わる 学校インターンシップ

特集
2

「本を読む」だけじゃない! 大学図書館

大教大
NAVI

天

アプリを利用すれば、今号の「天遊」に関連した動画が視聴できます。

「大教大NAVI」アプリをダウンロードして、左記のアイコンと同じボタンをアプリ内でタップするとカメラ画面に切り替わります。次に左記のアイコンをカメラに読み込ませると、動画が視聴できます。

詳しいアプリの使い方はホームページをご参照ください。



国立大学法人
大阪教育大学

教職を知る、子どもと関わる 学校インターンシップ

学校現場において、教育活動や校務、部活動などの支援や補助業務を体験することで、教員の多岐にわたる職務を知り、子どもについて理解を深める学校インターンシップ※。同制度をご紹介します。

学校インターンシップは、学校現場での活動と事前事後指導への出席などで単位が取得できる制度です。学生は、大学での事前指導を受けた後、受入校の管理下で授業観察や補助、放課後の学習指導、運動会のような学校行事の補助などを行います。日々の活動は日誌に記録し、受入校に提出します。インターンシップ終了後、大学で行われる事後指導を受けることで、活動を振り返り、今後どのような学修が必要かを洗い出す契機とします。

※所属する専攻・コースや回生によって、科目名や授業形態、必修選択の別が異なります。



Interview

教育実践アドバイザー 今川 恵美子

いざ子どもを目の前にして、大学で学んだ理論と現場での教育活動を結びつけて考えることは難しい。子どもとどう関わり、どう理解していけばいいか。先生方はどのように対応されているのか。自分だったらどうするか。そして実際にやってみたらどうなったか。さまざまな経験をし考えることが、学校インターンシップの第一の目的です。加えて、学校の先生には生徒の立場からでは見えなかった仕事もたくさんあり、それを知るのも重要です。教育実践支援ルームには、教科書、学習指導案、教員採用試験の過去問など豊富な資料、パソコンやコピー機、グループ学習スペースが整備され、教育実習や教採対策などにも活用できます。また、教職経験をもつアドバイザーが、子ども理解、授業づくり、学校現場との関わり方などさまざまな相談にのっています。学校インターンシップに限らず、気軽に来て、学習に役立ててほしいですね。



NEW OPEN

教育実践支援ルーム

元校長や教育委員会関係者など学校教育に精通したアドバイザーが、学校現場での活動を支援します。

- 教育実習や学校インターンシップに関する相談
- 学習指導案などの資料閲覧
- 授業準備
- 実習に向けたグループ学習



インターンシップ生のとある一日



いいの ゆうき
飯野 湧貴
学校教育教員養成課程
小中教育専攻
美術・書道教育コース
2回生
〈受入校〉
柏原市立堅下南小学校

8:00 職員室に到着

どのクラスに何時間目に入るかを確認。教頭先生をはじめ先生方は気さくな方が多く、話しかけやすいです。



1時間目 3・4年生の「特別活動」

先生と、先生の発言に対する児童の反応を注目して見えています。特に、叱り方。直接的な言葉で注意するのではなく、子ども自身が間違いに気づけるよう誘導し、さらに他の児童にもプラスになるやり方が参考になりました。



2時間目 2年生の「算数」

教室を歩き、手が止まっている児童に声をかけます。大学で学んだことを先生が実際にやっているのを見たり、自分で実践したりできるのは、学校現場に毎週行っているからこそ。先生たちは、全体を見ながら、一人ひとりのフォローもして、その二つがきちんとリンクしてすごいなと思います。



3時間目 3年生の「理科」

授業を見て勉強するだけでなく、積極的に自分から参加するように心がけています。先生方から指示されたことはもちろん、他にも手伝えることはないか常に探しています。



4時間目 4年生の「算数」

季節や行事前後で掲示物が定期的に変わるので、どの教室でも必ずチェックします。先生方の工夫が詰まっていて、見ているだけで楽しいし、勉強になります。



給食・掃除

子どもたちと一緒に給食。家族や友達、好きな食べ物などが話はずみです。



5時間目 1年生の「生活」

授業の最後には、子どもたちと一緒に元気づけの挨拶をしました。



Interview

柏原市立堅下南小学校 野田 俊弘 校長

飯野さんは、ボランティア活動に積極的に取り組むなど、前向きでしっかりしている印象で、本校でのインターンシップを希望していると聞き、快諾しました。先生方からの評判も良く、一生懸命取り組んでくれています。来年には、教育実習生として受け入れることも決めました。

受入校としては、学生が来てくれることで、短い時間で多くの子どもたちに目が行き届くので助かる。学生にとっても、現場を知ることができる。この制度は、受入校にも、教師にも、子どもたちにも、学生にとっても意義があると思います。

学生が最初から上手にできるわけがないことはわかっているので、大教大には、ためらわずに送りだして欲しい。学生には「大阪の教育を担うのは大教大だ」という誇りをもって臨んで欲しい。そういう意識をもって本校では迎え入れていますし、個人的にも大阪の教師の先輩としてそんな風に思いながら大教生を待っています。



「本を読む」だけじゃない！ 大学図書館

静かに本を読む場所から、学びを深める空間へ。
図書館には、学習や研究をサポートする「人」と「場」があります。

CASE

01

Q 課題が出た！どこから手をつけたらいいの…

A カウンターで図書館職員に相談してみましょう。レポートを書くための手がかりとなる本、論文、ウェブサイトなどを紹介してくれます。図書館職員と話しているうちに方向性が見えてくるかも。まずは気軽に声をかけてみましょう。

Interview 図書館職員

学術情報課サービス係 川下 愛子

例えば「この計算の答えは？」と聞かれたら、直接お答えはしませんが、代わりに解き方が載っている参考書を紹介するなど、解決の糸口を見つけるお手伝いをさせていただきます。こういったサービスを、レファレンスサービスといいます。取り扱うのは本や論文にとどまらず、ウェブサイトなども含めた情報全般です。

情報化社会が進んでいく中で、ただ来館者に本を貸すだけでなく、図書館という場所やそこにある人的資源をいかに提供し、活用してもらうかが問われています。本学図書館には、豊富な経験をもつ職員が多く在籍しています。レポート、卒論、教育実習のための授業づくりなどに悩んでいる時は、ぜひ相談してほしいです。



CASE

02

Q 皆で発表に向けて準備したい！



A グループワークには、ディスカッションやプレゼンテーションの練習などができるスペース「ラーニングcommons:まなびのひろば」。組み換え自由な机、移動式のホワイトボード、プロジェクター、電子黒板などがあり、多様な学習が可能です。イベントスペースとしても活用されています。また予約制の個室「グループ学習室」もあります。逆に誰にも何にも邪魔されず、静かな空間で集中したい時は「サイレントルーム」へ。パソコンの持ち込みも禁止なので、静寂をお約束します。



CASE
03

Q こんな初歩的なこと、聞いてもいいのかな？

A いいんです！わからないことがあれば、遠慮せずに図書館職員に質問してください。職員に質問するのはなんとなく気が引ける…という方、柏原キャンパス本館では、学生サポートスタッフが活動中です。授業期間中、週3回程度図書館カウンター付近で、本の探し方やデータベースの活用法といった図書館利用に関する質問や、レポートの書き方などの相談を受け付けています。ほかにも、「レポートの書き方講座」などのイベントを行っています。赤ジャンパーが目印です！

Interview 学生サポートスタッフ

大学院教育学研究科理科教育専攻1回生 北野 萌音

現在、サポートスタッフ(通称サポスタ)は5名います。デスクでの相談受付、サポスタ通信の発行、Twitterの運用、イベントの実施など、活動はみんなで話し合って進めます。サポスタ通信は、どうしたら読んでもらえるか、いつも悩みながらデザインや内容を決めています。今は、自身が理系であることを活かした実験レポートの書き方講座を計画しています。いろいろなことをやっているのですが、なかなか認知度が上がらないのが課題です。イベントや情報発信を通して、図書館に行ってみよう、サポスタに相談してみようと思ってもらえるよう頑張りたいです。



まだまだあるぞ、図書館の魅力

新たな発見も！ 多彩なイベント

お菓子を使ったプログラミング体験や、お薦めの本を対戦形式で紹介する「ビブリオバトル」などのイベントを実施しています。



鮮やかによみがえる！ 昔の教科書をデジタル化

本学所蔵の旧教科書約300冊をデジタル化し、本学附属図書館のウェブサイトで公開しています。江戸や明治の教科書など、貴重な教科書を気軽に見ることができます。



みんなの発信の場 たまごギャラリー

学生が制作した作品を展示できるギャラリーです。ゼミやサークルなどでのグループ展はもちろん、個展を開く学生もいます。絵画・写真・立体作品の展示だけでなく、訪れた人自身も参加できる企画などさまざまな催しが行われます。



本との出会いをプロデュース 特集コーナー

特定のテーマに関連する本を集めた特集コーナーを設置しています。旬な話題、季節のイベント、雑学などテーマはいろいろ。普段手に取らないようなジャンルに会い、視野を広げることができるかも。職員が工夫をこらした装飾にも注目してください。



Twitterで開館時間やイベント情報などを発信中！

【附属図書館】@OKU_lib 【附属図書館サポートスタッフ】@daikyo_lib_sp

▶ 好奇心に正直になる

「文学は心を形にするものだから、人間に心がある以上、文学は不滅だろうと思っています。経済効率に役立つかどうかではなく、それによって楽しくなる人がいる、豊かになる人がいる。そうやって幸せになることが、人間が生きていくのに一番役立つことじゃないでしょうか」と、井上直子准教授。

子どもの頃から本ならなんでも好き。家にある字が書いてあるものはかたっぱしから読んでいました。「当時流行っていた野球漫画が大好きで、ノートや教科書に絵を描いたり、外では草野球をしたりしていました。漫画にでてくる魔球の練習もしましたね」。黙々と興味のある事にまい進するタイプでした。

フランスとの出会いは、偶然でした。大学で中国哲学を勉強しようと思っていたのに、外国語の選択

をうっかりフランス語にしてしまいます。「勉強してみるとすごく相性が良くて、初めて外国語に惹かれました」。言語だけでなく、フランス映画や音楽にも興味を持つようになります。中でもフランス文学の、論理的にテキストを読むところが性にありました。一語一語を丹念にたどり、小説の構造をあぶりだしていくのは、主観的にどう思うかという感想を求められることの多い国語の授業とは違ったと言えます。「大学の講義では、先生が専門としている作家の文章を読むのですが、先生方の解釈は切り口が鮮やか。金太郎飴を普通と違う角度で切ったような、こんな風に見えるんだという驚きがありました」。学生時代の一番の思い出は、フランスへの留学です。「ホームシックにも全くならず、本当に楽しかった。奨学金

をもらっていたので、日本にいたときのようにバイトに追われることもなく、自由に時間が使えました。伸び伸び暮らして、背も伸びたくらい」と笑います。

博士号を取得後、本学欧米言語文化講座（現グローバル教育講座）に着任します。専門とするフランス文学の中でもずっと興味をもっているのは「自分と世界との関係」について。「哲学者、小説家、画家など、いろんな人が世界と自分の関わりを論じています。彼らは、それぞれが友達だったとか、影響があったというような直接的な繋がりが無いにも関わらず、同じことを言っていたりします」。そういう事例を集め、同じ見方をする人が増えたり、意見が変化したりするのを時間を追って整理し、わかり易くまとめて紹介したいと意気込みます。

人前で話すのは好きではなく、授業は今でも緊張すると言います。「でも、知識を伝えるのは好き。最近ではフランス語検定の情報やフランス語のクイズなんかをTwitterで投稿しています」。数年前に、学生からSNSで情報発信をしてほしいと言われて始めました。「やってみたら意外に楽しい。匿名性が高く自分が隠れているのが好きだし、字を書くのも好き」と言いつつ、炎上したら止める」と公言しています。

学生を見ると、点数や評価を気にしている人が多いと感じます。「求められることに応えるのが勉強とか使命と思っている。だから何を求められているのか、答えを知りたい、間違っているのを過剰に恐れている」。そうではなく、もっと自分の好奇心に正直になってほしいと望みます。「そもそも答えなんてありません。言われたことだけをやるのではなく、自分の思う通りに行動して、まだどこにもない答えを自分なりに見つけてほしい」

大阪出身の井上准教授。言葉の終わりに関西人特有の言い回し「知らんけど」が度々登場します。「私の言う『知らんけど』は、下手に断定して間違ったら恥ずかしい」と、『私はあくまでこう考えているけど、人の思いは様々なので、あなたの考えは知りませんよ』という、フランス人の考え方と同じような意味と両方あります。他人に左右されないが否定もしない、言動に責任を持てども気負わず自由。軽やかな佇まいが印象的でした。



グローバル教育講座

井上 直子 准教授

INOUE NAKO

授業探訪



大教生はどんな授業を受けているのか？
講義室をのぞいてみました。

論理と数理パズル《上級編》

理数情報講座 町頭 義朗 教授

「ではこの問題を、トランプを使ってグループで話し合ってみてください」。取り組んでいるのは、『横一列に並んだ、4個の箱のどれかに猫が入っている。開けた箱に猫がいなければ、猫は今いる箱から隣の箱に移動する。最大何回箱を開けることで猫を見つけられるか』という問題。学生たちはトランプを箱に見立て、一列に並べ裏返したり、左右入れ替えたりと、議論しながら試行錯誤します。

「この授業では、正解を言い当てることではなく、どうしようかと考えてもらうことを大事にしています」と話す町頭義朗教授。そのためにグループワークの時間を多く取り、合間に少しずつヒントを出していきます。「4箱のうち、最初は偶数番目の箱に猫がいると仮定したらどうなりますか」と町頭教授が問いかけると、「2番の箱をあけた後、3番の箱を開けると必ず猫がいます」と学生が答えます。「そうです。では、3番の箱を開けて猫がいなかったら？ それは、最初に偶数番目の箱にいたという仮定が間違っていたということです。そうなった場合、ここから最大何回箱をあけると猫が見つかりますか」。さらなるヒントを受けて悶いた学生たちが、グループの他の学生に説明し始めます。

数理パズルとは、算数や数学的な発想を応用して作られたもの。数学を専攻する学生ですぐに解法がわからないこともしばしばです。「これは偶奇性を使った問題です。箱を偶数と奇数の二つの属性でくくって考えることで法則が見つけ出せるのですが、以前に高校生に説明した時も理解してもらうのに時間がかかりました」と町頭教授は笑います。

授業の一番のねらいは、「伝えたいことを、他人にどうやって伝えるか」を学ぶこと。「問題が解けて嬉しいと喜んでいただけでは駄目です。その解き方をどのように説明すれば相手に理解してもらえるか、ということを学んで欲しい。そうすることで論理的思考が身につきます」。まずは問題を理解したうえで、それを人に伝える面白さを知ってほしいと、班活動やプレゼンテーションの機会を多く設けています。毎回授業の冒頭で、前回の授業で指名された学生が宿題を解説するのもその一環です。解説してもらう学生は、授業中の様子を見てランダムに指名します。「どんな解説をするかは学生に全部任せています。聞いている学生の反応は結構手厳しくて、自分ならこうやる、といった意見もありますね。私自身も学生から学んでいる所があります」

授業の合間には、前回の授業で回収したコミュニケーションカードを読み上げ、そこに書かれた内容にリアクションを返しています。中には授業に関係のないものもあり、学生たちから笑いがおこることも。「授業の感想や質問などを書いてもらいたいのですが、『失恋したんですがどうしたらいいですか』みたいなものもあります。“ちょっと一息”的な時間ですね。答えるのが結構難しいと笑いながらも、学生のコメントに淡々と突っ込みをいれていく姿は自然体です。

学生には、年齢や理解度など相手に合わせた説明や伝え方ができる力を身につけてほしいと望みます。「そのためには、恋をするのが一番。好きな相手には、何を考えているんだろうと気を遣いながら、あの手この手を使って、一生懸命説明するじゃないですか。だから学生たちにはいつも恋をしなさいと言ってます」



【授業DATA】

主な対象学生：学部1回生～5回生
開 講 期：2018年度後期 金曜2限
備 考：初等教育教員養成課程
夜間コースを除く



子どもを支える存在に

大学院教育学研究科学校教育専攻 2回生 **阿部 海渡**さん（大阪府立寝屋川高等学校卒）

「『教える』という仕事を通じて、子どもの成長を支えることができる人になりたい」と阿部海渡さん。

高校生の時にオーストラリアに行き、科学が好きな世界中の高校生が集まって実験や議論をするプログラムに参加しました。「議論のテーマは、『科学者は、広島・長崎の原爆投下を防げたか』。みんながいろんな意見を出す中、私は何も言えませんでした。何より悔しかったのは、原爆の悲劇を科学の視点で考えたことがなかったこと。『日本の外には、同年でも全然違うことを考えて頑張っている人がある』と、衝撃を受けます。英語の勉強を続け、今度はアメリカ人高校生との国際交流プログラムに参加。『自分で考え、結論をはっきりと言葉にする喜びを感じた』。この経験を機に、アメリカの大学で学ぶことを決めます。

「視野が広がすぎて、頭がおかしくなりそうだった」アメリカでの大学生活は、幸せだったと同時に、恵まれすぎているとも感じていました。「みんな高額な学費を払ってもらって、生活の心配もなくひたすら理想を語る日々。議論は楽しかったですが、社会とどう関わればいいのか分からず、悩みました」

卒業後帰国し、アルバイトをしながら、中学生時代の恩師である兵庫県立大学・竹内和雄准教授の講演

会について回ります。竹内准教授は、子どものインターネットやスマートフォンのトラブル予防に関する研究の第一人者。一緒に活動するうちに、子どもと触れあう面白さに興味を持ちます。「特に面白いのは、子どもたちの価値観が、社会の変化とつながっていること。刻一刻と変わる社会情勢にあわせて、子どもが直面する問題もどんどん複雑になっている。しかも子どもはそれぞれ個性があり、抱える事情も違う。画一的な見方では理解できない現状があると知りました。そんな子どもたちに寄り添いたいと、教員になることを決意。子どもを通じて、保護者や地域などに繋がりが広がることにも興味をひかれました。

本学大学院へ進学し、学校教育講座・水野治久教授の研究室に所属します。「先生は毎週学校に足を運び、現場が抱える問題を解決しようと尽力されています。学会で活躍しながらも、困っている子どもやその周りの大人たちへの支援を続けている。本当に尊敬しているし、目標とする存在です」と語ります。

今年の夏には、日米の高校生がインターネット上のいじめについて考える「<関西ーアリゾナ>ネットいじめ予防会議交流プログラム」を、水野教授や本学初等教育講座の戸田有一教授らのもとで実施しました。日米の高校生18人が、世界共通の問題で

あるネットいじめを減らすための取り組みを紹介しあい、意見を交換。8か月間テレビ会議で交流し、その後アメリカの高校生が日本へ、日本の高校生がアメリカへそれぞれ訪問しました。「だんだん打ち解けて、自主的に経験を語り出し、大人の力を借りずに思いを共有し学び合う姿を見た時は感動しました」。プログラム実現のために、アメリカ大使館への助成金申請や、クラウドファンディングでの資金集めにも奔走しました。「プログラムを通して、広い社会の中で活動することの難しさと醍醐味を感じました」

今取り組んでいるのは、困っている時に助けを求める行動「援助要請」についての研究です。「悩みがあっても、相手が気を悪くするかも考えるなど、いろんな理由から助けを求められない子どもがいる。特にインターネットの問題は大人には理解しにくいことも多く、子どもも助けを求めにくい」。中でもSNSでの出会いから起こるトラブルや犯罪被害に着目しています。

「子どもの頃から好奇心が強い。その分飽きっぽい」と笑う阿部さん。「現状に納得がいかない時は、新しい視点から現状を再評価し、もう一回やってみます」。行動力の源は、あふれる好奇心と情熱、冷静な現状分析にあるようです。

家族のような仲間と過ごした4年間

養護教諭養成課程 4回生 **仲田 絢音**さん（大阪府立泉陽高等学校卒）

中学2年生で養護教諭になろうと決めていたという仲田絢音さん。部活動の副顧問だった養護教諭の先生に憧れたからでした。「優しいだけでなく、怒るときはきちんと怒って指導する。生徒の微妙な表情や態度の変化にすぐに気づいて、話を聞いてくれる。そんな先生でした」。目先のことだけでなく、子どもの将来を考えた上で、その時その時に必要な助言をする。自分もそんな養護教諭になりたいと、本学養護教諭養成課程に進学します。

「養護教諭養成課程は、医師、看護師、元養護教諭などの先生がいて、いい方ばかり。授業には実技もあります。3回生の時、授業で開業医の方が来られて、さまざまな症例とその対処の仕方について、実際の患者さんの写真を使って教えてもらったことが、とても印象に残っています」。学生も、穏やかで優しく、人の心がわかる人が多いと感じています。また、教員という同じ夢をめざす学生が多いことから、モチベーションが下がった時も周囲を見渡して頑張ろうと思いき直すことができました。「授業での発言一つにしても、この人はそんな所まで考えているのかと驚いて、同じように採用試験を受けて教師になるのだから自分も頑張らなければと、いい刺激をもらえます」

怪我などの救急対応に慣れようと入部したのは、

アメリカンフットボール（以下、アメフト）部。もともとアメフト自体に興味はなく、最初に希望していたのは、怪我をした選手の応急処置などを担当する『トレーナー』になることでした。「でも、先輩から外部の人たちとの連絡調整が主な仕事である『主務』を担当してほしいと言われました。新しい人と出会い、人脈を広げるのが好きというのもあったので引き受けることにしました。主務は地味な事務仕事が多く、あまり評価されていないと感じることもありました。でも、主務になったからこそ、他大学や関西学生アメフト連盟、OBOGの方など、たくさんの人と出会うことができました。普段あまり話すことのない上の年代の人たちと関わる機会が多く、それも楽しいと感じています。「アメフト部の同期は、友人というより家族に近いですね。週5、6日練習があるので、一緒にいる時間は家族よりも長い。ずっと一緒に戦ってきたので、彼らが勝つためなら何でもできます」。辞めたいと思った時も、同期の存在に励まされ乗り越えてきました。

今は卒業論文に向けて、熱中症の実験を行っています。「大学内に、温度と湿度を自在に調整できる部屋があります。例えば気温30度、湿度80%というように条件を設定し、30分程度おいておくと、目的

の環境ができあがります。その部屋を使って、条件を変えながら体温の上がり方などを調査しています」。ゼミ生みんなで作業する毎日です。

教員採用試験に合格し、春からは念願の養護教諭になります。「子どもの表面的な言葉ではなく、その真意をわかってあげられるようにしたい。教育実習の時に『こんなこと言われたから、お母さん嫌い』という子がいました。でも嫌いなわけがない。子どもの気持ちに寄り添いながら、本当はお母さんが好きだという思いをなんとか引き出せないかと試行錯誤しました。子どもの多面的な部分に振り回されないようにしたいと気を引き締めつつ、一方で不安もあります。「実習に行って、とにかく先生方の仕事量が多いと感じました。あれもこれもしないといけない、でもどんどん子どもたちはやって来る。効率良く時間を使わないといけないと頭ではわかっていますが、難しいですね」

「大学という最後の学生生活で、就職や社会人になることを見据えたことばかりやるのはもったいない。私はこの4年間、学生らしいことをいっぱいやって、後悔はありません。一度始めたことは簡単に辞めたくないという仲田さん。誰も見ていなくても、些細なことでも、手を抜かず、やり通す。そんな姿が皆から信頼を得ています。

BAGの中身

夢や希望でいっぱいの大教大生のカバンの中を特別に見せてもらいました。

パステルカラーの服が好き！
鞄はスニーカー派です。



鍵

つけているお守りは、伊勢神宮のもの。毎年必ず家族でお参りしています。

茶道の本

茶道部で年2回、先生のお家で稽古をします。その時に先生が出してくださる茶道具をこの本を使って確認したり、勉強したりします。

水筒

高校の卒業記念品としてももらったものを、今も使っています。

手作りのしおり

大教の入学試験の帰りに、駅で偶然見つけた四つ葉のクローバーで作ったしおり。今も持ち歩いています。



文武両道な
大和撫子

さえき みお
佐伯 美緒さん
教養学科
文化研究専攻
3年生



①鞄 ②化粧ポーチ ③財布 ④語学学習には欠かせない電子辞書 ⑤ハンカチ ⑥筆箱 ⑦筆記用具 ⑧リップクリームなどの化粧品 ⑨小物入れ ⑩イヤホン ⑪水筒 ⑫折りたたみ傘 ⑬手作りのしおり ⑭定期入れ ⑮ドイツ語の問題集 ⑯手帳 ⑰茶道の本 ⑱ふくさなどの茶道具 ⑲鍵



茶道部のお稽古中。



両親と一緒に「NISHIKI MARATHON」を完走！

大教大
NAVI 天

オフショット動画が見られます。

「二つのことを丁寧に」
大学会館1階にある和室で練習する茶道部。部長として部をまとめたのは、佐伯美緒さん。カバンをのぞくと、まずはふくさの赤が目を引きまます。「週1回、茶道の先生に来ていただいて、本格的にお稽古をしています」。茶道で学んだ所作が、ふとした瞬間の動作にあらわれると言います。
今は、英語とドイツ語の勉強に力を入れています。「就職は教員が企業はまだ考えている途中ですが、将来的には自宅で子どもたちに英語を教えたい」。アルバイト先の学習塾では、近隣の教室の講師が集まる研修会にも積極的に参加しています。「意識の高い人が多く、そういう教え方もできるのかと毎回勉強になります。他大学の人と知り合えるのもいいですね」。就活対策にもなっている「石二鳥」などとか。最近フルマラソンに初挑戦し、見事完走しました。沿道からいたたく声援が、すぐ力になって、走りきることができました。次の目標は？「茶道には、稽古の段階ごとに学ぶことを許可する『許状』というものがあるのですが、『上級』という許状の取得をめざしています。勉強面では、ドイツ語検定2級を取得することです」。運動大好き、空手も長くやっていたという佐伯さん。ふんわり可憐な大和撫子は、二つの物事を丁寧に向き合い、コツコツと地道に努力を続ける人でした。



大阪教育大学

附属学校園ウォッチ

Affiliated School | Osaka Kyoiku University



附属学校でセレッソ大阪がサッカー教室を実施

セレッソ大阪が運営するサッカースクールのコーチによるサッカー教室が、附属特別支援学校で開催され、同校と附属平野中学校の生徒ら35人が参加しました。

これは、本学とセレッソ大阪とのフレンドシップ協定に基づき、本学との交流事業の一環として企画されたものです。普段は異なった教室で学んでいる両校の生徒たちが、スポーツを通して一緒に学習し、共に助け合って協働する力を身につけることを目的に行われました。

なでしこリーグの現役選手や、元Jリーグ選手らの指導を受け、生徒たちはパスやドリブルをしながら障害物をかわす練習を行いました。コーチらの巧みな技術を目の当たりにし、生徒たちは感嘆した様子でした。その後、生徒たちは3つのチームを作り、総当たり戦のミニゲームに挑戦。元気いっぱいにサッカーを楽しみました。

参加した生徒たちは、「選手3人対生徒全員でも、選手3人の方が強かった。プロはすごい」などと声を弾ませ、生徒たちへの事前事後指導などにあたって附属特別支援学校の中島弘貴教諭は「子どもたちは本当にサッカーが好き。来年度もぜひ実施してほしい」と喜びました。また同校の長江京子副校長は、「あっと言う間の1時間で、子どもたちが友達と一緒に活動する喜びを味わえる機会になりました。コーチの指導も、楽しく学べる工夫をされており、すばらしいものでした。このような機会を継続して持っていきたい」と語りました。

セレッソ大阪スタッフの長谷川顕氏は、「スクールで普段からサッカーをやっている子どもに教えるのとはまた雰囲気の違い、楽しい時間を過ごすことができました。アカデミックパートナーである大教大とは、今後も双方のリソースを活かした様々な連携事業を行っていきたいと考えています」と述べました。



ゼミ室ぐぼれ話

《理科教育講座無脊椎動物学研究室》

第7話

生田亨介先生の無脊椎動物学研究室は、みんな生き物が大好き。ウミホタルやホタルミズを研究している人がいたり、研究室でウーパーパーを飼っていたりします。もちろん、生田先生が誰よりも生き物が好き。生き物について興奮しながら話す様子は、少年のようです。

そんな研究室だから、「大教生き物チーム(DIT)」を結成し、イベントで森林の虫とふれあうワークショップを行ったりもします。先日も先生がデザインしたおそろいのTシャツを着て、子どもたちというんな虫を実体顕微鏡で観察したり、虫の習性を調べる簡単な実験を見せたりしました。虫は、イベントのたびに柏原キャンパスで捕まえるのですが、これがなかなか見つけれない。途中、授業で習った別の生き物が出てきて、みんなそっちに興味を向けてしまい気がそがれることも。後ろを通って行く人たちは不審に思ったかもしれません。でも苦労した甲斐あって、ワークショップは大盛況。中には虫を連れて帰ろうとした子どももいたりして驚きましたが、とても楽しかったです。

面白い先生がいて、生き物好きの仲間がいて、自然豊かなキャンパスがある。恵まれた環境だなと改めて実感しました。

(田嶋大輝さん 学部3年生)



〈キトリ〉×

天遊 vol.46 アンケート

●本号でよかった記事を下から選んでください。(3つまで。その他は具体的にお書きください。)

【 】【 】【 】
(その他)

- ①学校インターンシップ ②大学図書館 ③ラボ訪問
④授業探訪 ⑤STUDENTS NOW! ⑥BAGの中身
⑦附属学校園ウォッチ ⑧ゼミ室ぐぼれ話 ⑨TOPICS

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。

()

●本誌をどこで手にされましたか。

()

●本誌をお読みになってのご意見・ご感想などをお聞かせください。

●次号以降、毎号「天遊」の送付を希望される方は記載をお願いします。(一度、送付希望ハガキをいただきました方は、再度お申し込みは不要です。)

どちらかに☑をしてください	☐ 次号以降、毎号「天遊」を送付希望します。 ☐ 今後「天遊」の送付を停止します。
ご住所 〒	
お名前	
お電話番号	

※お預かりした個人情報は広報誌「天遊」の送付以外には使用いたしません。

01 柏原キャンパスの「虫」や「木」を使ったワークショップを実施

本学理科教育専攻と美術教育専攻の学生、教員らが、「水都おおさか森林の市2018」でワークショップを開催しました。本学公式キャラクター「やまお」も登場し、来場者と触れ合いました。

「森林の市」は、木材や食べ物など森林の恵みを通して、森林と人とのつながりを実感してもらおうというもの。イベントのイメージに合うとして「やまお」が参加依頼を受けたことがきっかけで、地域貢献と教育活動の紹介を目的にブースを出展しました。当日は50を超える団体による販売や体験のブースが並び、およそ3万人が訪れました。

理科教育専攻の学生らは、柏原キャンパスで集めた虫を使い、実体顕微鏡で観察したり、虫の習性を示す簡単な実験をしたりしました。美術教育専攻の学生らは、台風で被害を受けた柏原キャンパスの木で工作するワークショップを開催。カットした木の幹に、同じくキャンパスで採集した木の葉や実などを貼り付けて置物を作りました。「やまお」も人混みにもまれながら、来場者との記念撮影に応じるなどして大学をPRしました。

参加者からは「虫に親しみがわいた」「台風で倒れた木がこうして生き返るのはすてきだと思う」といった声が聞かれました。美術教育専攻の学生は、「子どもから大人まで多くの方に楽しんでいただけて良かった。自分にとっても貴重な経験になりました」と話しました。



02 府立高校生200人が大教大の魅力を感じ



大阪府立高校42校で構成する「府立高校教職コンソーシアム」加盟校の生徒らを対象に「キャンパスガイド」を開催し、約200人が参加しました。在学生による大学紹介や施設見学ツアー、大学教員による特別講義など、大学の魅力を伝える様々な催しが繰り広げられました。

初めに在学生4人が先生と生徒に扮して、大学の特徴などを授業風に紹介。続いて10人程度のグループに分かれ、在学生の案内で講義室や体育館などを見学した後、食堂で一緒に昼食をとりました。午後からは、文系と理系に分かれて特別講義を受講しました。箱崎雄子准教授による英語の講義では、英語らしく聞こえる発音のポイントが解説され、町頭義朗教授による数学の講義では、数学的な考え方を使って解く数理パズルに取り組みました。そのほか、「めざす教師像」をテーマにしたパネルディスカッションや、高校生の質問に在学生が答えるコーナーを実施しました。

参加した高校生からは、「同世代や大学生のいろいろな話が聞けて、教師になりたい気持ちが強くなった」「同じ目標をもつ仲間がたくさんいることを実感した。自分の夢について深く考えることができた」などの感想が寄せられました。

(キリトリ) ✂



料金受取人払郵便

柏原局
承認

532

差出有効期間
平成31年
10月31日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
大阪教育大学広報室 行

✂ (キリトリ)



公式 Twitter

@OsakaKyoikuUniv



公式 facebook

https://www.facebook.com/OsakaKyoikuUniv



公式 Instagram

@osakakyoikuuniv

各種イベント、ニュース等を配信しています。
是非フォローしてください。

公式アプリケーション

Android・iOS
スマートフォン対応アプリ天遊の
動画も
見れる

大教大NAVI

大阪教育大学入試ナビゲーター

取材時のオフショットや、紙面では伝えきれないイキイキとした学生・熱意のこもった教授などのナマの声を動画で配信!

〈詳しい使い方はホームページをご参照ください〉

App Store・Google Playから検索。



大教大



※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ①本学学生 | ②本学卒業生 | ③本学保護者 |
| ④本学教職員 | ⑤附属学校生 | ⑥附属学校保護者 |
| ⑦附属学校卒業生 | ⑧附属学校教職員 | ⑨名誉教授 |
| ⑩教育委員会関係者 | ⑪他大学教職員 | ⑫他大学学生 |
| ⑬その他() | | |

「天遊」とは

「天遊」とは荘子の言葉で、人間の心の中に自然に備わっている余裕を表しています。キャンパス統合移転の記念碑に銘文として刻まれており、揮毫は故水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。「天遊」の読みからとった「TenYou」は、「十人十色、その中のあなた」というメッセージを込めています。



本誌はユニバーサルデザインフォントを使用し、再生紙に印刷しています。
この印刷物は、13,000部を695,500円で、すなわち1部53.5円で作成しました。